



文教大学の授業

2024.1.13 No.87

文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
TEL 048-974-8811 フax 343-8511



参加型学習方法を取り入れた社会教育学に関する授業

人間科学部 金 藤 ふゆ子



大学院博士課程修了後、東京都立教育研究所、茨城県内私立大学の勤務を経て2013年度から本学に着任。専門は社会教育学、教育社会学、生涯学習。研究テーマは成人を対象とする学習プログラム編成過程研究や、児童生徒を対象とするExtended Learning(放課後プログラムを含む)の実態や効果、及びその事業に関する教育政策に関する国際比較研究に取り組んでいる。特に社会的に恵まれない状況に置かれる児童生徒にとっての放課後プログラムの内容とその効果の分析に関心がある。
(かねふじ ふゆこ)

人間科学部の学部授業では社会教育主事（社会教育士）の資格取得に関する科目である「社会教育経営論Ⅰ」「コミュニティと社会教育」「生涯学習概論」や、教員免許状取得に関する「教育社会学」を担当している。社会教育主事資格に関する科目では、参加型学習方法としてのフィールドワークやディベートの手法を採用した授業を実施している。ここでは前者2科目「社会教育経営論Ⅰ」、「コミュニティと社会教育」の具体的な内容を紹介したい。

1. 「社会教育経営論Ⅰ」におけるフィールドワークを取り入れる授業

社会教育経営論Ⅰは、人々の学習を支援する社会教育施設について人的・物的・財政的面や事業の実態、及び施設の意義・役割や課題の理解を目的としている。そのために本授業では講義と共に、学生自らが地域にある公民館・図書館・博物館等の社会教育施設の職員を対象とするヒヤリング調査に取り組む。

殆どの学生は、過去に図書館や博物館等の社会教育施設を利用者として活用した経験はあっても、施設の専門職員を対象とするヒヤリング調査の経験はない。調査にあたり学生はグループ別に訪問したい施設案を検討し、決定する。そして自らが施設に電話をかけて本調査の趣旨をご説明し、訪問の可否を尋ね、アポイントメントを取る。こうした作業からフィールドワークとしてのヒヤリング調査の学びが始まる。本調査の内容や趣旨をご説明

して施設側の理解を得るまでには、メール等を含めて複数回の施設側とのやり取りが必要となる場合もある。実際のヒヤリング調査では、学生はICレコーダーや手土産の文教グッキーを持参し（授業予算で貰われる）、成人としてのマナーにも配慮してグループ別に特定の社会教育施設でのヒヤリング調査を実施する。

現地調査にあたり、各施設の基礎情報を予めホームページで検索して学習し、施設側へのご負担を少なくする。また直接おうかがいしなければお聞きできない職員の観点から見た施設経営の現状、課題、展望等をお尋ねする。こうしたフィールドワークを経て得た情報を基に、学生はグループでプレゼンテーション資料を作成し授業内の発表を行い、意見交換をする。こうした学習活動を通じて学生は社会教育施設の現状や課題を肌で感じ、課題の原因や解決の方途を深く検討する。

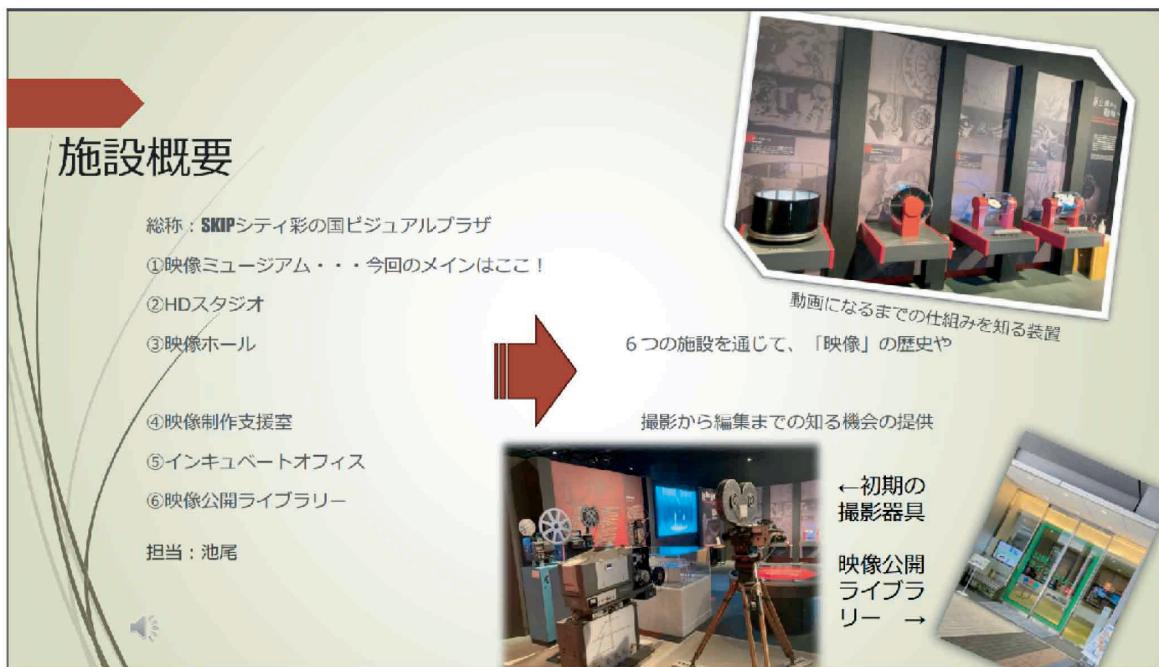


図1 2023年度授業で学生が現地ヒヤリング調査を基に作成した提示資料の一部

受講者の中には当然ながら社会教育主事（社会教育士）の資格取得を目指す学生も多くいる。本授業を通じて学生は改めて社会教育施設の専門職員の職務の実際を理解する。さらに実際に訪問すると公的施設でも所管する行政組織の違いや、公的施設と民間施設によって人的、物的、財政的資源の規模が大いに異なる事実に気づく。いわばそうした現場での学びを通じて、学生は地域の社会教育施設の経営の実態や課題と共に、社会教育施設の専門職員の役割についても深く考える機会につながっている。

2. 「コミュニティと社会教育」におけるディベートの手法を用いる授業

本授業では、前半において「コミュニティと社会教育」の現状や課題を理解するための講義に基づく基礎的な学びを行う。中盤から後半にかけては、学生自身が「コミュニティと社会教育」に関する現代的課題や議論の分かれるテーマを協議して決定し、ディベートの手法を用いた検討を行う。前半の講義で学生は、ディベートの手法についても改めて学習する。立論、尋問（質疑）、反論、反駁という大別すると4種の議論の留意点や立論の構成の仕方を学ぶ。そのうえで、学生は自分達が選択した主題についてグループに分かれて肯定側、否定側、審判のいずれの役割も経験するように準備作業に取り組む。それぞれ

の準備作業を踏まえて、実際に授業内ではエビデンスに基づく資料を提示しながらディベートを実施する。ディベート後には元のグループとは異なるメンバーとグループになり、自分自身の考えについて実はどちらの立場か自らの意見を表明し、議論を重ねる。

こうした学びを通じて、学生は「コミュニティと社会教育」に関するテーマについて肯定側・否定側双方の考え方を理解し、テーマをより深く検討する。審判は肯定側・否定側を担当しない学生全員で行う。個別に計10の観点からZoomの投票形式を用いて判定を行う。勝敗はその集計結果を基に決定される。審判の経験も肯定側・否定側の発表を注意深く聴く姿勢を養うことにつながっている。

具体的に過去に学生が取り上げたテーマを紹介しよう。主題としては例えば「町内会制度の廃止は是か非か」「社会教育施設における指定管理者制度の導入は是か非か」「日本のにおける死刑制度の存続は是か非か」「小学校における教科担任制の導入は是か非か」といったテーマが取りあげられた。テーマには社会教育やコミュニティに直接関係するものの他、学校教育や市民一般の議論の分かれる幅広い主題が選択されている。ディベートを実施することで、学生間の授業内のコミュニケーションはより活発になると担当教員としては実感している。